

御伽草紙と二十四孝

御伽草紙とは、南北朝時代から江戸時代初期の間に成立した読み物で、広い階層の人々に受け入れられた短編の物語の総称で、多くは作者不詳と説明される場合とこれをもつと狭め、江戸時代は享保の頃、大坂の書肆(出版元)、渋川清右衛門の刊行した「正文草紙(鉢かづき)以下二十三編の称と言われています(広辞苑)」。手元にある岩波古典文学大系には、これら二十三編に、「福富長者物語」や「三人法師」など五編が加わり、二十八編で御伽草紙を構成されていますが、いづれにしても身分の低かった人にも親しまれたお話で、平安時代の、例えば、源氏物語のような恋愛物語から抜け出して、復讐談やら、怪異談、立身成功談、あるいは笑話に至る様々なお話が集められ、この御伽草紙の類とされています。「鉢かづき」「一寸法師」「浦島太郎」とそのお話をあげれば、大抵、この御伽草紙の性格が分かるというものです。

選択国語でこの御伽草紙を選んで学習しようという生徒がいるとは夢にも思わなかったのです

が、現代語訳された御伽草紙は、それこそ現代の童話で読みやすかったのでしょうか。

内田さんが取り上げた「二十四孝」は、中国の元の時代に郭居業という人が、家庭教育、それも特に幼児教育のために、二十四の孝行物語をまとめたものといわれています。取り上げられたお話の時代は中国の古代から唐・宋の時代、人物は、上は皇帝から庶民各層にわたって採録されています。これが、やがて、中国から日本に渡り、ヒットします。「孝行録二十四章」「新刊全相二十四孝詩選」「二十四孝列伝」「本朝孝子伝」「孝行物語」等々。同じ時代の「蒙求」も二十四孝と同じような話。挙げたらキリがありません。

御伽草紙の二十四孝は、中国の二十四の孝行話を忠実にしかも分かりやすく和文にしてあります。各々のお話も二十四孝詩選から始まっています。

隊々耕春象 紛々転草禽
嗣堯登寶位 孝感動天心

二十四孝、冒頭の「大舜」です。

春に象が列をなして田を耕しています。

又鳥が飛んできて田の雑草を取り除いてくれます。これだけでは何のことか分かりません。でも、舜の孝行話を知っている人ならぴーんときます。舜の余りに孝行に感じ入って、象が田を耕し、鳥もこれを助け、天子は感動して娘を舜に与え、天下も譲るといいます。「これひとへに孝行の深き心より起れり。」結びの一句です。お話としては具体性のないつまらない話です

が、子供らに親孝行を語るにはいい話だったのでしよう。

もう一つの「孟宗」に至っては、これはお母さんのわがままだ等という意見がありました。病気の母親の願いを聞いて、雪中の筍を探します。「食の味はひも度毎に変わりければ、よしなき物を望り。」「雪深き折りなれば、などかたやすく得べき。ひとへに天道の御あはれみと頼み奉るととて、祈りをかけて大きに悲しみ」といいます。

すると、「大地ひらけて、たけのこあまた生出侍りける。」ということになるのです。そしてまたこう結びます。「孝行の深き心を感じて、天道より与へ給へり。」

江戸時代、貞享・元禄の頃、井原西鶴という作家が、「本朝二十不孝」と題した読み本を著して、この孝行話からかかっています。文字通り不孝話を二十集めたのです。二十四孝ならぬ二十不孝です。

その序文。「雪中の笋、八百屋にあり。鯉魚は魚屋の生船にあり。」

雪ん中のたけのこなんざあ、今時、八百屋にいやあ売つてらー。鯉だつて、魚屋の生け簀にあるだろう、と痛烈です。鯉の話は二十四孝「王祥」の話。晋の王祥は、継母のために冬の氷つた川に生魚を求め、衣服を脱ぎ裸になって、氷の上に伏したところ、氷が少しとけて、二つの魚が躍り出たという話です。その鯉、何にしたかって？なますにして継母に食べさせたなどと言われています。今なら児童虐待というところでしょう。